
【エッセイ】老いては事を仕損じる

があわいこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【エッセイ】老いては事を仕損じる

【Nコード】

N9022J

【作者名】

があわいこ

【あらすじ】

親の介護に実家へ戻ったら病気になった私のボヤキ。

痛い

最近、すごく寒いせいか体中が痛い。

いや、もっと前。暑い頃からずっと痛いのである。

まず、朝起きるときからもうすでに腰や背中がぎりぎり痛んで布団を上げることができずに掛け布団とベッドの間からはい出るようにして起きる。

目覚まし代わりの携帯電話のアラームを止めようとすると今度は両手の指が痛くて思い通りに動かせない。

携帯を開いてアラームを止めるだけで苦痛に顔が歪んでしまう。

原因はわからない。

そういえば耳鳴りが激しくなったのも同じころだ。

これは一つ思い当たる原因がある。

父の大声だ。

耳が悪いので自分の声が聞こえないせいか、とにかく声が大きい。

一緒に食事をしているときに大声を出されると跳びあがってしまう。毎日何度も注意やお願いをしても聞き入れてもらえない。本人は聞こえないのだそうだ。

これにはホトホトまいる。

大きな声を出されると、痛むのは耳だけではない。

心臓はバクバクするし、胃もキリキリ痛む。

今月からまた胃の薬が一種類増えた。

胃の話はまたいずれ。

($\cup \cup \cup$)

痒（かゆ）い

今年も花粉がやって来た。

一番最初は2月15日。右目からだった。

痒くて目がしらをこすると……い、いかん。

一生こすっていたくなるようなかゆみが襲う。

こすってはいけないのだ。

でもやっぱりこすってしまう。

毎年のことなので少々我慢もできるようにはなった。

が、顔を洗うときが一番まずい。

イケないとわかっていのに何度も目頭をタオルで拭いて（つまりこすって）しまうの。

そしてついに掃除の後にくしゃみの連発。

そう。花粉だけでアレルギーが出るわけではないのね。

ハウスダストや排気ガス。

そして普段は大丈夫な魚も、なるべく控えるようにしないといけない。

小さい頃からアレルギーをおこしてきた物質が今は1つ1つなら大丈夫になって来たがこの季節、重なって「お出まし」になると、ダメなんだな。

これからゴールデンウィークが終わる頃までつらく苦しい日々が始まるんだわねえ。

それで夏の終わりごろから2〜3カ月、つまり秋にも花粉症がやってくるのよ。

一年の約半分は、痒くて調子が悪いことになるわ。

そういえば入学式や新学期が始まる頃はいつもあまり調子がよくなかったなあ。

頭が重くて息が苦しかった。

当時は生きるってこんなものかと思っていたけど、周囲の子は元気に飛び跳ねていたわ。

私も真似したかったけど、できなかったの。

あの頃は自分も家族も学校の先生も知らなかったけれど、それってアレルギー（花粉症）の症状だったんだわね。

おっと、その「頭が重くて息が苦しかった」というのは、もちろん秋にも当てはまりましたよ。

遠足や運動会も周囲が言うほど楽しいものじゃありませんでした。

面白かった（？）のは近所の世話好きのオバさんが私にお見合いの話を持って来た時。

お相手が獣医さんと聞いてすかさず、「動物は嫌いではありませんが、猫の毛のアレルギーです。」とはっきりお断りできたの。

たまに病気も役に立つわね（苦笑）

ぜんそく↓アトピー↓花粉症とアレルギーを渡り歩いてきたけれど、今度はどんなアレルギーが待ち構えているのかしら？

嫌だけど、楽しみだわよ。こうなったらもう…はあつくしょん！

合わない

1977年4月。

最後の最後で合格通知が来た大学へ通うために家を出ることになった。

計画は成功した。

「教員免許をとる」という約束と引き換えに私はついに家を出て夢の一人暮らしを勝ち取ったのだった。

父は愛人宅へ行ったきりで母一人の収入だった上におばあちゃんが二人とも（！）家にいたので仕送りはほとんどないし貧乏暮らしは覚悟の上だったが、一人きりになれるということだけで他には何もいらなかった。

1970年の初めのころ…ビートルズを知ったところから自分がこの家に合わないとかかにつけ感じてきた。

とにかく家を出たかったが経済力もないし、その想いは漠然としたものでしかなかった。

地方に住んでいたなら「東京へ行きたい。」という口実も作れたが、当時の家はその東京にあった。

引っ越しはバンドのメンバーだった大学生のT君とその彼女（高校の友人）の二人が手伝ってくれた。

6畳一間にトイレが付いたアパートの家賃は破格の1万6千円。1ブロック先に銭湯もあり、初めての一人暮らしがここから始まった。

一人暮らしは楽しかった。寂しくないかとよく聞かれたが、そう感じたことは一度もなかった。

熱を出して一晩こたつの中で一人唸っていたこともあったけれど、

不思議に寂しいとは思わなかった。苦しい時にそばでごちゃごちゃ世話を焼かれるより、誰も面倒を見てくれない方がよっぽどさっぱりとして気分はよかった。

もう2度と家族の元には帰らない。
そうこつそりと胸の中で誓っていた。

家族はいらないし、新しい家族を作る（＝結婚する）こともないだろう。

一人暮らしを始めてやっと本当の自分になれたような気がしたのだ。

だが、そうはうまくいかなかった。

新しい家族は作らないという計画はうまくいったが、2度と戻りたくなかった家に30年ぶりに戻るようになってしまった。

両親が倒れたのだ。

こういうとき、一人っ子は本当につらい。

それから3年余りが過ぎたが、家に人がいる生活は未だに不自由で仕方がない。

お互いに歳をとったが、家族とは合わないと感じたあの思いは今も変わってはいないのだ。

むかつく

今起きた。

朝からずつと痛かった胃の具合はやつとよくなった。

が、こんどは首が痛い。

「食事をしてすぐに横になつてはいけませんが、どうしてもというときはリクライニングにして休むように。」とお医者様から言われているのでそうやって眠っていたからだ。

ひどいむかつきを覚えて胃食道逆流症と診断されてから5年近くになるが、一向に回復の兆しが見えない。

もちろん毎日3種類の胃薬を飲み、食べてはいけないカレー、ラーメン、揚げ物類なども、この5年間口にしていないのにだ。

確かに治りにくい病氣らしいが、もうそろそろ改善の兆しが見えてもいい頃なのじゃないかと思うのだが。

あゝ、今年の夏も枝豆にビールはおあづけかしら？（炭酸や豆類もNGなのだ。）

それにしても朝からあんなに胃が痛いと思ってしまう。

やらなくてはならないことが山ほどあるというのに。

会社なら休んでしまふけれど、家事はそうもいかないでしょう？

主婦の皆さんはこういうときどうしているんだろう？

腰をまげていくらかでも痛みが少なくなるような体制で掃除洗濯買い物をしなくてはなりません。

汚れのひどい床を力を入れてこするときとか、大きなバスタオルを物干し竿にかけるときとか、痛くなるのを覚悟で「せーの！」と掛け声をかけてやりますよね。

痛くて脂汗が出ます。

母はそんな私を遠巻きにしながらもじつと見ています。

調子の悪い時の様子をじっと見られていると余計にイライラしますねか？

実母だからかなあ。

姑さんなら気にならないのかな？

そうそう。

おいしかったパンがまた安売りしていたので買ってきて母と食べましたですよ。

そうしたら「おいしいね。初めて食べた。」

とまたまた、ボケるので、

「この前食べておいしかったからまた買ったんじゃない!？」

と、つい言ってしまったのですが、

いけないそうです。

ボケてはいても自分がボケてきたことはわかるので、「ボケてきたね。」ということは傷つけることになるというわけです。

でもね、そうするといつも私が悪者なのよね。

ま、いいか。

でもまた、胃が痛くなってきちゃうなあ。

出せない

なかなか暖かくなならないヘンな気候も一段落して梅雨前の晴れの日
はとても気持ちがいい。

だが、この家はベランダに物が干せない。

日陰とかそういう物理的なことではなく、心理的な問題があるから
だ。

場所は今住んでいるこのマンションではないのだが、私のおばあさ
んは8階のベランダから落ちて亡くなった。

父の母、つまり母にとってはお姑さんだ。

父は別宅（つまり母ではない女性の家）に行っていていなかった。

この時すでに痴呆の症状がかなり進んでいたおばあさん。徘徊が日
常化したいた。

だから事故だと私は考えているのだが、当時の新聞に「病苦の老女、
飛び降り自殺」と出て知人友人たちを驚かせてしまった。

事故後、すぐに刑事さんが来て家族別々に「事情」をきかれた。

私も家を出ていたのだが、この日は冬休みに入ったために一時帰宅
していたのだ。

家族全員「疑われた」わけだが、特に母は自分が一番疑われたと思
い込んでいてしまっている。

つまりマンションのベランダは母にとってトラウマの現場なのだ。
布団を干しに「私が」ベランダへ出ることも非常に嫌がる。

下を覗くなんてもつてのほかだ。

この家に私が引っ越してきたからベランダで布団を干したのは一回
きりだ。

あとはどんなに天気が良くても布団乾燥機のお世話になっている。

洗濯物も同様にいつも室内干しと決まっている。

そんな私も先日母が「あらいやだ。」という一声を遺してベランダから落ちるユメを見てしまった。

やっぱりトラウマ（PTSD？）があるのかなあ。

もういちど、太陽の光にお布団を当てたいけれど、いつになるかしら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9022j/>

【エッセイ】老いては事を仕損じる

2010年10月8日14時21分発行